

河内路上（菊池溪琴）

南朝古木鎖寒霏 六百春秋一夢非
幾度問天天不答 金剛山下暮雲歸

解説 南朝に満腔の同情を寄せ、武家政治を忌み嫌う心情が込められている

南朝の古木 寒霏に鎖さる

語釈 ※河内路上⇨河内の金剛山の麓に楠氏の遺跡を訪ね、往事を追懐したので、このように題した。

※南朝古木⇨後醍醐天皇が笠置山で「南木」（楠）の夢をみて正成の挙兵を予知された故事にかけている。

※寒霏⇨冷たい霧。*六百春秋⇨六百年。後醍醐天皇の笠置行幸からこの詩の作られたときまで五百余年たっており、概数をあげた。*一夢非⇨一場の夢となった。

※問天⇨天に問う。*金剛山⇨奈良県と大阪府の境に南北に連なる山脈の主峰。

六百の春秋 一夢非なり

幾度か 天に問えども 天 答えず

通釈 南朝時代からの老木はあたりにたちこめた冷たいもやに包まれて、さびしく立ちならんでいる。思えば楠公の事蹟も六百年もたった今となってはむなししい一場の夢と化した。このことをいくたびか天に向かつてたずねてみたが、天の答えるはずもなく、ただ金剛山の麓に夕暮れの雲が寂しく帰って行くのを見るばかりである

金剛山下 暮雲 帰る